

ル技術の担い手として、学生会員ももっと増えればと思います。

今後日本支部としては、繊維学会等のジオテキスタイルに関連している学会との連携をもっと密にする必要があると考えています。

なお、ジオテキスタイルのJISについては、ISOとすり合わせるなど国際的な活動が日本においてもより重要になってくると思っています。

—最後に、私を含めこれからジオテキスタイル技術に携わっていただくという技術者にひとことお願いいたします。—

岩崎幹事長： 現在までは、いろいろと考えながら試行錯誤しながらジオテキスタイルを用いてきたので心配はないのですが、今後JISや種々のマニュアルが出来て一般化すると、逆に、それに基づかない安易な使い方によるトラブルが起こることも考えられます。その点についても十分注意して欲しいと思います。

また、ジオテキスタイルはあくまでもジオです。「土と水とジオテキスタイル」の各々の性質をよく理解して用いる必要があります。土は、理論のうえに、経験を積むことも大切で、実証・実学の世界です。対象地盤を調査した上で適切な使い方をする必要があります。土と喧嘩してはいけません。

—今日はお忙しい中、時間をつくっていただき、また短時間にこれまでの経緯から今後の課題までをお話しいただき、本当に有難うございました。—

聞き手・文責：熊谷 浩二（前田建設工業(株)技術研究所）

記録担当：川崎 廣貴（清水建設(株)土木本部）

石井 学（前田建設工業(株)技術研究所）

新しい I G S 理事に赤木俊允東洋大学教授

I G S 理事のうち、今回選挙の対象となった6つの理事ポストに対して、6名の立候補者がありました。このため、無投票で6理事が決定されました。

これまで理事として、福岡正巳日本支部長が活躍されておりました。しかし、I G S の規定で理事の立候補は2期以上できないことになっております。今回の選挙にあたり、日本からの代表として、赤木俊允東洋大学教授に立候補をお願いしておりました。

赤木教授は、埼玉大学客員教授を併任されておられるほか、現在アメリカ土木学会(ASCE)の日本支部長および土木学会の土構造・基礎委員会委員長として、また土質工学会(元理事)その他の学協会において幅広い活動をしておられます。I G S 日本支部では創設以来の幹事、ジオテキスタイルシンポジウム組織委員会委員長、および編集委員会委員長、またI G S 本部においてはニュースレターの副編集長(アジア担当)として活躍しておられます。

これからI G S 理事としてのご活躍をお願いするとともに、日本支部としても絶大な支援をしていけるよう会員の皆様のご協力をお願いいたします。(熊谷 浩二)

